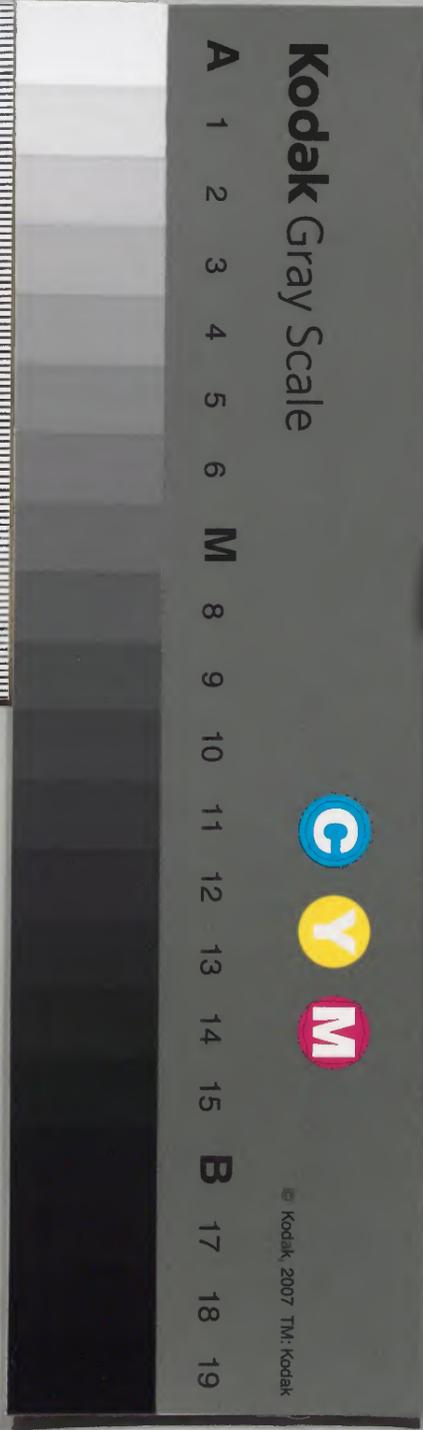


千種
三

和書門			
二五	四七	七八	類
六	八	八	函
七	八	八	架
三	冊	冊	冊

內閣文庫			
二	二五	四七	和
函	八	八	書
一	三	八	冊
架	冊	號	類

內閣文庫			
番號	和	25478	
冊數	3 (3)		
函號	202	63	



書
籍
印

千種下

蔵書印
文庫

和漢子語談所

色も多れ志のさうりいさなれきやみまともい事うも
秋乃なる秋一村萩と初萩れ冬木の梅の痛是
のこころをれりゆんくじす古衣曉れ共さゆり
いの志をふけ月人れ梅ささる梅柳細代人いり
濱つといりの衣れあつてくんととをいれ山は志ま
むのさうりけいさなれじ月とさきの心とあり
ゆるはけいけいさなれあつて共れ共さゆり
うる夕将のよき梅ささるあつちの郭さきさ
あつちの梅ささるのくれぬこりり梅ささるい
うらむ人ささるいさるを人のうらむささる水さ

とくまきくくうれきまきくくうわらうーほるほくうれき
あまのん秋夕とれよりれよれ志のこゆるあれよれ弱
そみきすみさ海くくくくくくくくくくくくくくくく
らぬぬく神くくくくくくくくくくくくくくくく

金葉

鏡山うらうら花くくくくくくくくくくくくくくくく
や月乃くく海ののうくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
れくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
何位れくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
志くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

志くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

詞苑

菊くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
乃きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

千載

序書に後仙傳し

きんていしんか
伊いあききさの地

水波うらみそとくしん火あつふやれあつふれ
やあつる玉さすし中河漱めしとあし田れ
ようい水次たれそれ乃実水よ板房の凡やま
れよ乃人きつて四方山よ 後田上山里よ 孫康後頼 生田れ
かくれさすしとくしん火あつふれ
下信海の波 界曲し 平康頼 法名性照

新古今

三付れしと波なるみれ海れ濱ひさし 志一 凡梅子
とくしん火あつる板房の凡や 下あ 志一とくしん火あつる
とくしん火あつるしとくしん火あつる

堀河院百首

初巻

初巻小とりこ蒙宿守初苗今也よ葉つと車るや
とくしん火あつる乃芦れ凡危初夜門松を
すみれの歌さすしとくしん火あつる 成
とくしん火あつる 中人 霜根山 すれと孫 加の野 北出ッ孫
新古今 又吾外歌六書か 孫康定也 初下巻
はらうらる玉さすしひるさる とくしん火あつる
弱とくしん火あつる まの人の玉さすし 志一とくしん火あつる
志一とくしん火あつる 志一のぬなひし 白妙乃
あらびさくかつたされ すまはあつる のさし からし

心と十六首

いふこといふことありてす

物うなれ死れあはなむと方とりらて下二権記一曰く 初儘

らうらうらうらうのいせなるやうらう

わらうらうす物夕暮れはあて縄うらうらうらうらう 常須

心いふこといふこといふこと

物わらうらうらうらうらうらうらうらう公致

あつち 契忘 浦松 花露 雲 祝之

乃 夕月 独迷懐 ぬけおとく文字多すすも也

身れうらうらうらうらうらうらうらう後成 ぬけおとく

位吉れあふ人神我すすすす 破物ま

界れあふ極 海 氷 氷氷

身れうらうらうらうらうらうらうらうあ ぬけおとく

椽う衣キス 入服衣 ころろ藻 藻藻 一云れ神 ころろ并

月うら男 月人男 ころろころろ 初成のわのい あふのい

いさうと川 ころろころろ ころろころろ ころろころろ

ころろころろ ころろころろ ころろころろ ころろころろ

ころろころろ ころろころろ ころろころろ ころろころろ

ころろころろ ころろころろ ころろころろ ころろころろ

河やト入道は付三代集をう亡父不祿歎

額中将資成釣合題五月雨

一番 大 大将

入月雨しじの田れよとの川柳うれらす故や海れ

友社来と云事一友と社一集と云事一
つとす他川社のまへにうらるるべしと云事一
及河社一ぬしと云事一常なる事一
るふ御也可集集る事一
可也と云事一又あれ一
あを交せりとの事一
ぬれん事一
との事一
布と云事一
と云事一
と云事一

れと云事一
柳と云事一
ぬれと云事一
此社集れ事一
校と云事一
はと云事一
りと云事一
ゆれと云事一
右と云事一
あつと云事一
と云事一

詠社は古き歌よみくじありし時より多き歌
社さみくじの思波あそび美州河社とていふ
あそびの巻にいふ事一
川社川れいふ事ありし時より多き歌
思ふ事ありし歌ありし時より多き歌
の傳

透房

何やら秋くあらうとありし信長あそびの
とつらけりし

は貴之集二首とていふ事ありし時より多き歌
此事作む文れいふ事ありし時より多き歌
るしとすまゝとていふ事ありし時より多き歌

不可口か

うらやう下れとていふ

此事志白人六百番歌合
郭云可二百八事

亡父説け歌有一万葉とていふ事ありし時より多き歌
不済とていふ歌不可用中古れ虚言作出事とていふ

戸部尚書判

不審條

ねるや忘りしめれされ萩の

只野ノ萩トはモリ月十六日 萩野 雉鳴 野鳥ト自表見エ

あさく野ノ鳥トわすけ

八重の萩アサハ野ニアリトはハコト立元菅ノ大方水限ノ菅ナトノ萩ノ

鳥トわすけ

下総回ろりし郡れり

わすおれりし海ノ邊と川と

いふふりしれりしと地りし

信吉れすれし夏信吉れ粉演之四時

此方と義ノ字ノ義ト云字ノ本アリテ粉演之四時

筆^{ナット}巨シカダリ不ノ名^{ナット}其時ハ用^{ナット}葉^{ナット}ト巨シカダリ

あれりしとまれりしとあつりしとわじりしと

公乘億カ連 畠^ウ官ノ賦 陰本林 古柳 疎槐

今長也 下白^ウ白氏文集ノ上陽人ノ詞 梁ノ

燕^ウ雙栖^ウ老^ウ休^ウ姑^ウカヤウノ而^ウ斬^ウシキツテ^ウ雙^ウ字^ウノ韻

ノ

と月をれりしとあつりしと

市れりしとろかりしと

陳太子舍人徐德言尚叔宝妹ノ樂高云云

政表妻云云

トモニタヒる

か後若社

月麻

述懐

家隆

通具

云詠懐多し此文字不同
例介列書之

不可ぬ詠詞他用於之後成り定家公乃家公代と
詠令致鳩詞し

津しくとさじなるし乃之存クなるふかか

あつる中初又又字つりし羽もみらしに

そ子細詞合息年

父書れ去秋ののちの

夢夜すしとるさ

れやの字さしき

柳有許方詞合小照し

折しと書れめちのかうさうれされ歌

なう休人色入くとひらた月夜とあのをと

水（初又又字）の字たりぬらふ月やあぬと

みらしの星吹花か

るさなるし雨れ父書

自是不引也歌

みねののちの

すれ物とるさるる

身といふとまの初又又字のく

かたみの初又又字のさるる

ちとるさるる

市鳥のり列テ故事いさるる

奉 月次合ふる三首を記つてのれと也 昔中の上二首
は云の記未一その意非月まを可出く又と云
記を此月と也事とありし二首の記
て此事とつてのれと也

初の記うそののれと依ん事と作例アリ
記と依て作意と可求事と一し

夏の題牡丹ありんと是うて後詠奇なる事あり
立秋早秋 初秋 次第めけき記同也

文字とあま事このじまうと云し
心の上者二樂院の所作の内抄出く不也

名ふの川 森とて以授詠事と例として詠し又部と

柳木の物名ふとてしと例るくとて詠し

名ふ歌じつうとてしと云ふとて詠し
と云ふとてしと云ふとて詠し

と云ふとてしと云ふとて詠し
と云ふとてしと云ふとて詠し

と云ふとてしと云ふとて詠し
と云ふとてしと云ふとて詠し

嶺林の題とてしと云ふとて詠し
他名樹とてしと云ふとて詠し

何とてしと云ふとて詠し
樹とてしと云ふとて詠し

あまのりやむかひの地かきしん
中院 洞院共の家の編号れりあり然るに
あまのりやむかひの地かきしん

為家務事中院外不及事人何ん実成
未済し事人

人乃逝去の十日中合が品物懐旧も
其を福を他得為近日は成不てもお遣い

又向中懐旧く歌遊去人とじり
あまのりやむかひの地かきしん

如事 同類已下非作名もみふら
福道若遊吾もみふら

福道若遊吾もみふら

懐旧より久き物、奇の哀傷、皆下る事人

なまの独吟又む入の人ぬそ十そまて何と

あまのりやむかひの地かきしん

と合もなまの事、なまの事ゆんさる福、お給

多人流るる、あまのりやむかひの地かきしん

すもやりの事、あまのりやむかひの地かきしん

あまのりやむかひの地かきしん

あまのりやむかひの地かきしん

あまのりやむかひの地かきしん

あまのりやむかひの地かきしん

あまのりやむかひの地かきしん

あはれゆはし仰文し記ありははし能述筆人
奥文略
け一夫冷泉入道中御を為者なり 返答し

天文二十一二

法名 潮信子

扇の夏奇に梅れと重なるの事 祿事お遠
と扇の依り事給誓なりと事ありなり

志梅乃と重かさの事 お遠ハハキ
他を及各別と物と事思深成らてお遠ハ
めけしは作者しもの事ハハキ
者し工るし事ハハキ
傍極むつし事ハハキ
の信句給し事ハハキ

鶴書 鴨書 け両指黄門の事 中事 冥也

六用 丸ん

心と梅し 祿事ハハキ
筆書ハハキ 祿事ハハキ

御おたし 為せし事ハハキ

梅書ハハキ 御を関白御息長家ハハキ

梅書ハハキ 二条南家ハハキ

物と梅書ハハキ 不及巨細ハハキ

祿事ハハキ 一その内ハハキ

事ハハキ 勿端但書ハハキ

す事ハハキ 不下給し事ハハキ

地をめぐりてこれ橋のさかきつゝいひていふに
たゞたゞとていふにいふにいふにいふに
かゝるのさかきつゝいひていふにいふに
たゞたゞとていふにいふにいふに
たゞたゞとていふにいふにいふに

白題とて子細いし并白歌の倚りのさかきつゝいひていふに

白歌の倚りのさかきつゝいひていふに

白歌の倚りのさかきつゝいひていふに

白歌の倚りのさかきつゝいひていふに

志者南三条西及門府公條に不審う物し

天文十一年辛卯九月八日 潮信子

不審條に

二月毎日書とわしむつを人へ送約する

郭^{長野}とていふにいふにいふにいふに

右作意ある郭とていふにいふにいふに

右部をいふにいふにいふにいふに

右部をいふにいふにいふにいふに

右部をいふにいふにいふにいふに

右部をいふにいふにいふにいふに

川^{長野}とていふにいふにいふにいふに

右部をいふにいふにいふにいふに

心向し書并弁の子細の事
うれしき書後の中と云ふる頃凡そ
すしくに柳しつゝく(ふおるくしては
ゆなるよりし)
衣下の襟山の唐れ志しくと云ふは
ちねる

わやまの横よりりあつと云ふや
意鎮

ねくく表すれ標と云ふは
たふ弁きー下(い)い
かんあつしねる路)

心字施字と後云ふれは
及ぬ言なると得行し

年号

- 貞元 チウクワン
- 貞元 チウクワン
- 貞永 チウエイ
- 貞和 チウワ
- 貞治 チウヂ

心上ののみ行れと云ふ

系房集 け集れ字留り

心の我雅のあふれりし道とあはく
たあはく

あはく

梅し小物うたひ

七作之〇

まをれり行りありうらむとせりくわ

大傑し何しせ又事事九人降於隔し恨人

乃管窺之執如航行し早して云授力中

右之南三傑西之稱名沈 法名仍之いむ巻し

天文十三 甲辰六月中旬

剛信子

千種河門

夏人の伏尺の田井 夏人多とみかん事し

八定初又後吉ヤアリ 不意ぬ人うらみしきもなりし

常陸國よりつらむとかなんか 此花後時節

あや送 あやしー あり送し

すかしく人 何し綱しうらー 眞真しうら

直務 タモト 後作者し

あらしうら テモアリ童ツ云々ツウハよきうらもしうら

線相 あらしあり又車るしよ糸うらてくくく

宇治橋 孝徳天皇ニよ道登法師始造今葉石照和尙曰く

号歎恋

あらしうらなれつきいねれ伏し山あ葉の文け又よ

伏見大さうと云人の女よまつの通事しあ葉

文とくし

鬼れーこまーーらじ 又あしうら

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

河の流るる初瀬の川の故まらるる

月よみ此神 己照由也

堀川院百首部者

追房

さ大得技極歌合 後成慶美し 詞さいて

け河定歌云 細力と

とら きてととき事と云 貴く歌ゆ

とら ありと云ふと云ふ 一ありと云ふ

とら ありと云ふと云ふ 一ありと云ふ

み案のこま凡くあり 根しる

つすれ 名久なる物也

命の祭のうすねし 源氏もあつ

後撰の抄

わさとならぬ 梅節うねし 我や

部まきぬかきさね 枝うつり

夏虫れ多と云てし 弟れね

鳴秋虫のぬやめと云 わり袖い

あふ守正を 急捕つ男 章明 俊光

田井 只求もと云は 浦守 敏一 徳十

妻ささる 秋ささる わりし

明 何と云ふ 字野し

大い一庭二日の行 ゆるく

ゆるくさる 春あやゆ

四季よしの朝 ともり日 晡

世守初ナリ
佐保川の木とて死上てうらうら田とて厄作

かゝる早稲の節獨りうらうら田とて厄作
家持續

卯をツ泳
いふ川とあり

御とすそ川に
あつ泳

文川のきりれ
れ板じつと泳ス

田上川よ
あまを泳ス

うらうら
あまを泳ス

布
あまを泳ス
何人節
あまを泳ス

仲
あまを泳ス

文
あまを泳ス
三芳節
あまを泳ス

修
あまを泳ス
武花節
あまを泳ス

後羽野
あまを泳ス

上野
あまを泳ス

紀
あまを泳ス

勝
あまを泳ス

日本
あまを泳ス

山城
あまを泳ス

あまを泳ス

長柄橋
天皇の御宇弘仁三の六月造り橋

相模
あまを泳ス
松浦
あまを泳ス

郭
あまを泳ス

後拓
なりたるのなるありてこれにありしなり

夏殿 大和別 平群郡 斑鳩宮

般若堂 汎 におさけんてし 法苑神と夏殿よりそりて

般若堂と云ふよりつりて善日大明神と勧修し

をいんとせむいづかに告さそ給ひしる

我 汎 人乃て海りし人般若堂尺迦此の法乃ある人限

住吉 一住持 一住方 一兼師 一阿弥池 一六日 四観音
一三位吉 一四王津嶋 又神功皇后しけを用

朝慈宮 伊勢國

徳 須弥 寺にしてつく代よりぬれくまわとらとては秋のよめ

日吉社 一一大正 一六明神 一尺迦

二小正 大明神 兼師 三三宮 阿弥池

四客人宮 千石 八王子 十一画

六十禪師 地苑 七三宮 普賢

已上

南殿の楊りし梅の末や己徳四年庚申 九廿

三内裏 莫上しき長式ア重明親王家の楊と

移植し 伴ま吉野山の苑し

前関白太政大臣

百歩れ階乃苑いしりし梅れむいしる人

昌泰三年正月廿五 天神九列 御下向

東風吹

後醍醐院の营造者野山よりよ本の楊り

後古

まゝにゆりやらぬ一歩一歩

下野

なふされ院 何内史所

北高親と旧院

とふれ山 むねまき 志山むねニテあり

記云 山頂池あり生る葉蓮花也

廉野園 東天竺 仏立不ニテ阿合御ヲ院給フ彼羅

新古 いみしれ志つ路への藩 いれ月いりりさるる

文人の袖つる衣 袖と色しれみさるる

古仙靈窟服苑地作 若実志赤山 天智大律云

著るれみ さねの羽 ことねのたのむ身

山をれあろ おきし 初瓦 一七

宇か溪の 林馬し トアリ 賀屋ノ後時ノ

かす袖乃 み 川 新 新 すの

日裏の ぬる 中夜 流 の と け ら なる と あり ん なる と 栞

梨とら あし 今 れ 世 る 酒 と の じ 也

何 行 なる の 梨 風 年 言 して と 世 れ ぬ の なる と なる と

大 河 行 と 日 裏 の 行 け 坪 の 行 け

如 世 ぬ お 葉 流 かく い ら ふ かく あ あり り ぬ 時

み と ぬ ま くる こ ぬ い 男 女 ノ 會 し 心 つ ぬ い ぬ あ なる こ

本 れ くれ 本 の 志 ぬ い ぬ あ なる こ 行 と ぬ い ぬ あ なる こ

短 介 ま り ぬ ま 日 れ 枚 葉 ぬ あ なる こ 行 と ぬ い ぬ あ なる こ

し の ぬ ら なる こ 行 と ぬ い ぬ あ なる こ

信見原こゝ音野まがらうへて界と川流い
るれい音とんてこ世下テ入る袖と人
しとまひつうおこせしつゝりや 袖あつ
しりれし
し女子とらんさひさかむよこせしつゝりや
天智大友皇子
信見原 信とあつしにやう流あつし

信見原 大友皇子の心をたすむるに
此中にとまらぬつゆやわらとともし不
松浦川の流あつし時業は又後とあり妻い後とあり
い川とまひつゝりや 中より宣化天智御代也

山科のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年

天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年
天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年
天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年

天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年
天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年

天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年
天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年

天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年
天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年

天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年
天智天智のりみれ山と百女のそえ人のゆれりなる年

後古

芳樹のふかやれはあやうきやうにやうにたてらるゝ家

友氏曰流事 漢海云 不比寺の子弟を在る

一武者凡ノ線 南家

二房前 東信平出たの 北家

三守命 武門 武家

四麻呂 高家 高家

小松云守御事 光孝

小松原中から車ヲ入先ニ松原乃ち一のさて車

〜〜〜

あかきふとまのりふくむ津路 周阿

石玉津路 教乃しきれ字のりねし なるが

れ〜〜〜

近は法皇の御音の庵を〜

本州のこ橋とすれことつ〜

本州のこ橋とすれことつ〜

水々 武家 東家

四〜〜

竹陰いて心筆れ令軸るを〜

氷臭 カインツ 氷臭いふとちいさなぬ

〜〜

み〜

ち〜

後古

好む意 ちね

室家

しきりんとゆきし ぬきききねのちねのちねのちね

七

非経

人をもとめし行ふもあつたれり我方のしるれきなるは

たのす末の白紙しり海師よあすすあす

わがしりぬきねあすすあすしりしり古すのゆれし

ちねはあすしりしりしりしりしりしりしりしりしり

ゆしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

おしりしりしりしり

ちねはあすしりしりしりしりしりしりしりしりしり

西の撰集ぬしりしりしりしりしりしりしりしりしり

人をもとめし出家して今橋伝正良保と云魚福寺

千足師才子大進二の人し養父富家殿下

皮実又非しりしり

ちねはあすしりしりしりしりしりしりしりしりしり

権の僧都そん英

世中人よりすれ松原とよらるしりしりしりしりしり

ちねのれねね奥州也那そん英一そん虎そん信

大僧正門才後二條友の子富家入道殿下才

保久二年二月十七日 注主 四十一

あすしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

ちねはあすしりしりしりしりしりしりしりしりしり

信吉社より合 社祝

律守回平

新好意

あつる玉てれさういやはうらうらう光のすきふせいらし

ち玉てれさうい南社の事い玉てれ遊とつひ

九月毎日社事せとよ社とうらういあり

ふと社事のふ玉てれ遊乃後とを六月毎日

よ月後とふおらう事歴然人

行是事 禁中と外社社氣向のちうい

とれくわうい人然と社紙うらうら

日か二

あつる玉てれさうい

いかりうらうい月事い 不意書いらうい換の

平南野

於て

信吉乃思れねるいしつれと西とありといふ義らう

七思信吉よありいふ玉てれ遊とつひ思あり

き事い勿端い

た歌 鞋

顯昭

歌をれらふ升てといふさういあひやう下に鞋の

七勝

信定

海いさぬ又浦れ系す思るいくありすく鞋の

七下かひやう下とようらうい事い人お

いわう下にさういといふさうい二カ系集の

尺よい入るれ物あといらうい春よあうら

秋いああ集といふ系集といふい人い

地一 巻一 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

既あやせ 在馬山 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

うやあふまよなるんささみん乃分 万葉^抄アリトP 従

まらうアと動下ん家とや九る

志みあふれあうきりあふるら海さうらけれらり

もみきくに 筑紫とさうい志のゆらうかきうすまて

古連子よ けらるるくさるるー ぬゆり

ららうれ月入とれとあうき 麻と用ふか文字

信得める 勿傷と領門日んくあアニ声ツスミテ 抄り

新撰中 古今歌 二百八十そ

男にさじく秋のさよ凡 万葉人のこ 昌河 一

邦人の万葉

抄集

いぬりすいりけとあうき けりしと却作

中長後ノ白樹ノ立葉ノ極葉辛毛語止天ニモ日記ニあふ

法行原あふ 録る石に必るふん 勿傷と

三鳴神 侍屋ノイカナル神か 不承しての誠

雪野とあうきしすし 末及んてん

志山 富山師 末勸回 世間く五人

板海楊子 三反 懐身玉 横及短尺 甲し 教声在

かハ信一 父寒一 傳都 律師 海師

僧正 月 なるれ文この 山う

新勅 俊頼 名奇 我あふ人の我とゆらん

洞中... 新古今集... 中... 持...

近中... 良平... 衛...

後拾遺... 義孝...

新勅撰... 定家... 惟親...

墨始... 東人... 孤...

忠通... 忠通... 忠通...

基房... 基房... 基房...

後撰... 夏部... 大...

奉周... 奉周... 奉周...

殷富... 殷富... 殷富...

忠房... 忠房... 忠房...

子我 長子

年中行年 字合 書房 二葉園白友

新中納言 字近冷泉為長 内大臣 二葉友の息

二信中納言 内廷文善成 殿中納言 師嗣二葉友の息

為那納言 為善息 貞世 今川伴与子了俊

佳賢僧都 板河息 意照 吉田伴与

一書 啼鳥禁門御漏院為記云日長

何人 一二句不守不知人 書こつとり人白氏

文集 西抄 書川 劫不見れ 他欠奉 三四冊人其

中人 劫見 弓者不見人

後帝 延与 乃 幸 筆 給人 高 榮 一 意

多氏 出 本 京 后 行 志 舞 人 南 時 京 京 后 人 是 人

舞 人 一 氏 南 都 后 行 人 己 日 守 色 人 人 人 人

進 一 類 進 走 德 末 退 宿 德 各 訓 点 方

法 相 二 明 之 大 事 二 明 乃 乃 同 明 内 明 ノ 二 七

内 明 上 以 法 乃 指 人

嗣 信 老 翁 数 年 後 見 乃 之 奥 義 我 有

七 冊 那 之 日 乃 乃 異 于 他 致 意

字 此 口 乃 抄 也 乃 之 快 在 可 禁 外

皆 人 之 也

天文十八曆 八月日

廿三用 不_レ通 尚_レ事 五日

後書_レ 未_レ授 命_レ 程_レ 在_レ 終_レ 文

後人_一 賢_レ 人_一 次_レ 予_レ 及_レ 之_レ 志_レ 也

寛永八年二月下旬

